

ミクロネシアレポート

環境、ゴミ問題について

横須賀市立横須賀総合高校

1. ミクロネシアについて事前に調べた事

私は事前の情報集めとして、インターネットを活用しました。

調べ初めの印象としては、南の島の代名詞のような透き通った海の写真がたくさん出てきたので、沖縄などを想像していました。

そして、写真と同じ位あったのが、ミクロネシアの環境問題の事を呼びかけるページ。意味的には、地球温暖化の影響で、水位が上がる事による被害を示唆するものが多かったと思います。

歴史：日本の統治

1914年に第一次世界大戦が始まってから、ドイツ領ミクロネシア地域を管理下に。太平洋戦争中の1944年2月に撤退。



国旗

それと、調べた事ではないけれど、ミクロネシアについての学習の時間を持った時、小さな島々の集まりを3つに分けて、その1つがミクロネシアだと学びました。

そして、他の2つがメラネシアとポリネシアだと気づきました。

ポリネシアというと、本当に電気なんか無い、自然のままな暮らしを想像していたので、ミクロネシアもそうなのかと思い、色々情報を探した記憶があります。



ミクロネシア版 レイ

と

マラカルという名前の花環

歓迎する時に相手に贈る

2. 実際に現地で見聞、観察した事.

私は環境、ゴミ問題を重点的に見聞、観察してきました。



ミクロネシアで1ヶ所しかないゴミ捨て場。

道路から、少し入っただけで、移動用のバスの中にハエがたくさん入り込んできて大変でした。

飛行機が形のまま捨ててあったり、分別が無いので全部ごちゃごちゃになっていて、ダイオキシンなども基準値以上出ているそうです。



ポントラップ（ソケース・マウンテン）の頂上から見た景色です。

ここから見える通り島と島が離れているので、ゴミをゴミ捨て場まで持って来ずに、昔と同じように海に捨ててしまふのが多いそうです。

そして、この時、足元や山の傾斜にもゴミが落ちていて、同行の観光局の人が拾っていました。

3. 思った事、まとめ

ミクロネシア滞在中、今までキレイな景色を見ていた中で、ゴミ捨て場は、一番ショッキングな場所でした。リサイクルできる物も捨ててあったり、ゴミに対しての感覚の違いが大きく違うということが、一目で分かる場所だったと思いました。

そして、ミクロネシアの学生が日本に来て、細かい分別のことやリサイクルのことを知ったら、どんな風に思うだろうと思いました。

そして、それで環境問題、ゴミ問題に少しでも興味を持ってほしいと思いました。

また、ミクロネシアの観光局で働いているJICAの H さんが同行してくれて、とても助かりました。英語でうまく伝えられない私にとって、英語に精通していて、ミクロネシアのこともよく分かっている H さんは、よきアドバイザーになってくれたからです。

なので、私は日本人からの視点でも、ミクロネシアに住む人たちの視点でも、この、ゴミ問題について深く考えることが出来ました。

私が一番深く考えたことは、H さんの言葉からです。

JICAの人やNGOの人が、環境問題に繋がる原因の改善点や、これから出来ることを、ミクロネシアの1つの州であるポンペイの人達に伝えても、何だかよそよそしく聞こえてしまって、あまり反応が良くないそうです。

しかし、その土地固有のポンペイ語で伝えてみると、ポンペイの人達は、途端に積極的になってくれたそうです。自分達でも、心の隅にあった考えとも一致したからではないかと、私は思います。

しかし、一番の理由は、土地の人同士が自分達の土地の為に動く、という事に意味があるのだと思います。

日本の政府や日本のたくさんの人達が、ミクロネシアの豊かな自然を守ろうと、活動しています。

しかし、全部を他の国の人達がやってしまったのでは意味が無いのではないかと思います。

真珠の養殖場でも、次の世代を育てている最中で、デスクワークをしていた人達が興味を持って、真珠の養殖という仕事に就いて、野外で一生懸命力仕事や、養殖作業に必要な勉強をしていました。

このように、生意気な言い方かもしれないけど、私たちの役目は、道を指し示すに尽きると思います。もちろん、助言みたいなものはいつだって出来るけど、実際に環境を変えていくのは、ミクロネシアに住む人達だと、私は思っています。

だから、初めにも書いたように、日本に来る学生たちに、環境問題について興味を持ってもらいたいです。

そして、今ミクロネシアの現状を、学生交流としてミクロネシアに行った私達が、どう思っているのか。このままだと、昔の日本よりももっとひどいことになってしまうのではないかと思っていること。

そのことも知ってもらいたいです。

そして、学生交流という機会を通して、私たちの思いがミクロネシアの人々に伝わってほしいです。

もちろん、どうすればいいのか、どうやったら改善できるのか、今私たちに何が出来るのかということも、少しずつでも探っていき、日本とミクロネシアが、もっと親身になって環境問題を乗り越えていけるように、橋渡しのようなものになればいいと思い、微力ながらこれからもずっと、頑張っていきたいです。